

20. ナシ園におけるハダニ類の早期発見技術

1. 背景とねらい

ナシ園でのハダニ類被害は、光合成能の低下による果実品質低下や早期落葉による翌年への貯蔵養分低下として現れる。現在のところ、県内でナシのハダニ類に薬剤抵抗性は確認されていないため、早期にハダニ剤が散布されれば十分な防除効果が得られている。しかし、ハダニ類は微小であるため発見が遅れ、防除適期を逃して十分な防除効果が得られないことが多い。

そこで、ナシ園内のハダニ類早期発見に好適な調査樹の選び方や調査部位について検討し、効率的なハダニ類早期発見技術を確立する。

2. 成果の内容

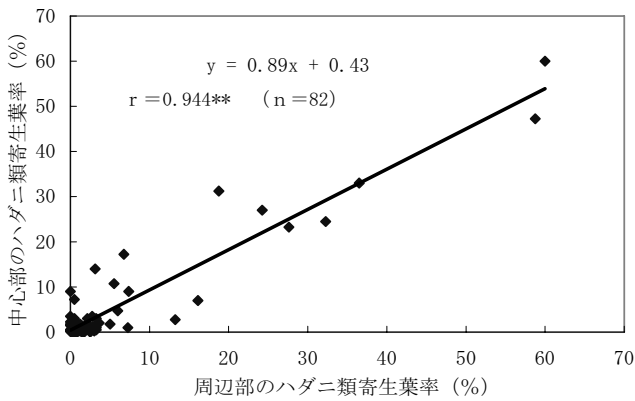
- 1) ハダニ類の寄生葉率を、園の中心部にある樹と周辺部にある樹で比較すると、調査時期や調査ほ場にかかわらず、ほぼ一定の比率（中心部：周辺部 \approx 9：10）で寄生しており、密度把握のための調査樹は周辺部の樹を選ぶことでより高率にほ場の発生状況を把握できる（図1）。
- 2) 1本のナシ樹の中で、①樹冠外部の結果枝に着生している葉（慣行の調査部位）と②樹冠内部の主枝に近い葉でハダニ類の寄生葉率を比較すると、調査時期や調査ほ場にかかわらず、ほぼ一定に比率（①：② \approx 5：10）で寄生しており、②樹冠内部の主枝に近い葉を調査することで、慣行の調査よりも約2倍の高率でハダニ類の密度把握ができる（図2）。
- 3) 以上の結果から、「ほ場の周辺部にある樹」を調査樹とし、「樹冠内部の主枝に近い葉」を調査することで、ほ場内のハダニ類を早期に簡便に発見することができる。

3. 利用上の留意点

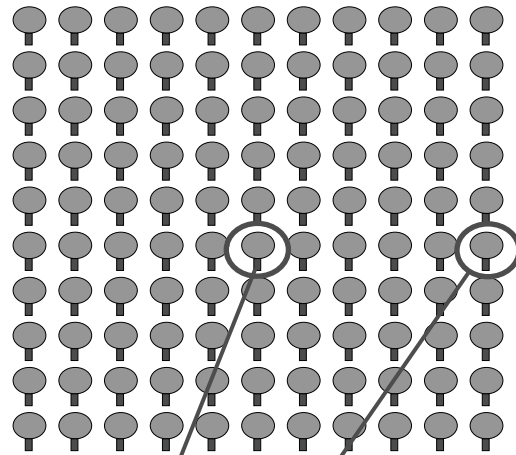
- 1) 本試験の調査ほ場では、カンザワハダニが主要種であった。
- 2) ハダニ類が高密度になると殺ダニ剤の防除効果が得られにくくなるので、ハダニ類の早期発見に努め、発生初期に防除する。

（果樹研究部）

4. 具体的データ

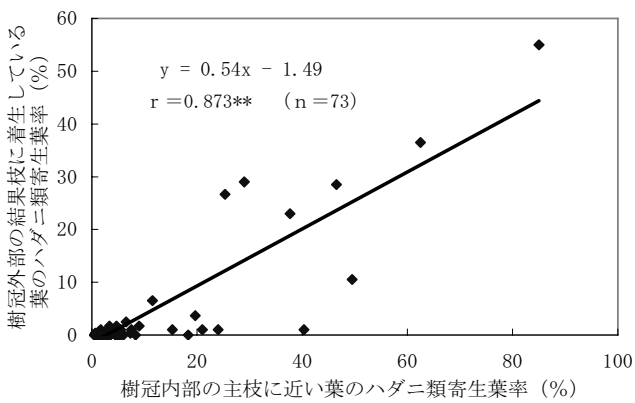


2005年4月下旬～9月下旬, 2006年5月上旬～10月上旬の世羅町現地ナシ園での調査データのうち, ハダニ類の寄生が認められた調査回のデータによる相関

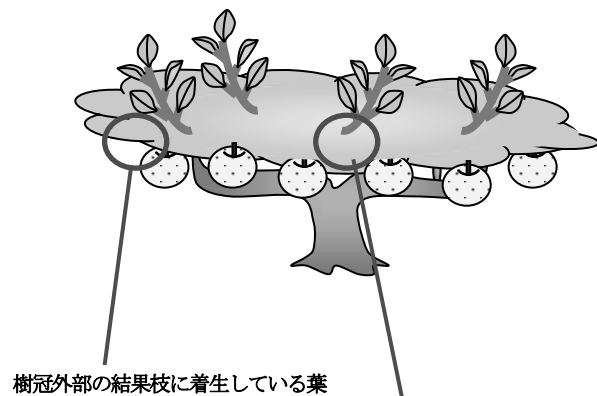


中心部 : 周辺部 ≒ 9 : 10

図1 ナシ園内の調査樹の位置によるハダニ類寄生葉率の差



2005年4月下旬～9月下旬, 2006年5月上旬～10月上旬の世羅町現地ナシ園での調査データのうち, ハダニ類の寄生が認められた調査回のデータによる相関



：樹冠内部の主枝に近い葉 ≒ 5 : 10

図2 ナシ樹内の葉の着生位置によるハダニ類寄生葉率の差